

旧薩摩藩における加世田麓・垂水麓・清水麓・国分麓・敷根麓の武家住宅に関する研究

土田 充義・揚村 固

(受理 平成5年5月31日)

A Study on Buke House of Satsuma - Han Fumotos - Kaseda Fumoto, Tarumizu Fumoto, Kiyomizu Fumoto, Kokubu Fumoto and Shikine Fumoto.

Mitsuyoshi TSUCHIDA and Katamu AGEMURA

From the later Middle Ages to the early Edo era - the later part of sixteen century, was constructed the castle which the greatest one in Satsuma-Han. Its city planning was regular on a large scale.

In other areas were lots of Buke's (Samurai's) settlement all over Satsuma-Han. The settlement was called Fumoto which consists of Buke's houses, the public office and open space in its front. Fumoto's planning was characterized by a great variety of the main route and streets. There were Buke's house built along the main route and some streets, and these drawing rooms located in the nearest front of the main route and some streets.

The great Fumoto's number was 113 areas in the Edo era. Seventeen Buke's houses were examined in five Fumotos - Kaseda Fumoto, Tarumizu Fumoto, Shimizu Fumoto, Kokubu Fumoto, Shikine Fumoto.

On the result, the drawing room was opened in two sides in which there were verandas and the center beam of roof was supported in the length of 4.924 meters (25 ken).

These are thought the principle form of Buke's houses. The form was consisted of two types. One type of Buke's house was considered that the ridge beam was made a right angle with the street and another type maintained the ridge beam in parallel with the street.

1. はじめに

旧薩摩藩の武家住宅に関する一連の調査を昭和63年以来行ってきた。それらの成果はその都度報告書にまとめたり、^{注1}日本建築学会で発表したりした。^{注2}武家住宅は街路に面し門を構え、その門は1棟(出水麓の冠木門)を除くとすべてが腕木門であった。腕木門といっても控柱を付ける場合と付けない場合があり、また屋根を2段にする場合としない場合があって、変化に富んでいるが、一般には屋根を二段にして、控柱付の門であった。控柱を付けることで、軒を深くできたし、屋根を二段にすることで棟を高くすることができた。^{注3}門を入ると目隠し(知覧麓では屏風岩と称す)が立ち、内部が見えない。目隠しを付けない武家住宅は国境を守る出水麓、高岡麓、志布志麓に多かつ

た。また生活をする人々に直接つながる井戸や便所が、主屋の前方にあることや庭・座敷が街路側にあることから、街路との関係で武家住宅を解明したいと試みたこともあった。^{注4}このことは重要な視点であるが、今回は武家住宅の基本形式はいったいどういうものであるのかに焦点を当てて記した。武家住宅において何が重要なかを明らかにしておきたいためでもある。

2. 武家住宅の基本形式

現在まで実測調査した武家住宅を基にその基本形式を考えてみたい。そのまえに武家住宅の特徴をあげると、その第1は座敷・縁側・庭が一体となっていることである。一体となるということは必ず、3者が現存し、それらが密接に結びついていることを意味する。第2は主屋の入口が1箇所又は2箇所設けられている

ことである。しかし玄関として飾り立てることではなく、縁側より一段低く踏み段を設ける程度であった。それは外部と内部の仕切が障子程度で、有機的結合を示していることを意味している。第3は寝室が鎖閉的で、狭いことである。以上のことは『おもて』で、それに付随して『なかえ』がある。この『なかえ』が『おもて』とどのように接続していたかを究めることが次に重要になるが、ほとんどの住宅は『なかえ』が改造されているため、これらからその接続の様子を捉えることはなかなか難しい。

3つの特徴を基に基本形式を考えてみたい。その第1の特徴から座敷の二方に縁が廻っている方が古い形式、つまり基本形式と考えうる。その理由は庭と結びつく面積を広く保持している方がより重要であると考えられるからである。つまり外部との接続する部分を広くすることで一体化を深めていると解釈できることによる。次に入口についてであるが、それは目だたなく素朴で、玄関の間は必ず設け、それが広い。これらが古い形式といえる。その理由は玄関が入口に接し、そこでは座敷へ入る準備をし、また主人と対面できる場であって、現在の玄関とは異なり、重要な役割を果たしていたといえるからである。第3の特徴で狭い寝室がどこに設けられたか、またその狭い部屋が実際に寝室として使われたかどうか。現在は衣類等の物を収納する部屋としている。その部屋は「ざしき」の背後に設けられている。「ざしき」との行き来ができない方が古い形式で、入口が「ざしき」に接しておらず、入口は背後の部屋に設けられている。以上のことを簡単にまとめると以下の通り図式化できる。

特徴 基本形式
第1「ざしき」+縁側+庭（開放的）→「ざしき」の縁側が二方向に設けられる。

第2「げんかん」+踏み壇+外部（開放的）→「げんかん」が広い

第3「なんど」（閉鎖的）→「ざしき」に接しながら入口がない。

3. 加世田麓の武家住宅の基本形式

加世田麓の武家住宅の7棟（表-1）を平成4年7月29日から31日まで3日間で実測調査を行ない、その結果指宿家住宅と松山家住宅が最も古い形式をとめていることが分かった。その古い形式とはどういうことかといえば次の通りに要約できる。

①「ざしき」は10畳で広く、庭と二方向で接し、そこに外縁がある。

②「つぎのま」はなく、「ざしき」は「げんかん」に接し、その「げんかん」は「つぎのま」の役割を果たしている。

③寝室にあたる「ごぞ」は6畳で比較的狭く、「ざしき」から往来ができなく、閉鎖的である。

④身舎の梁間は2間半程で納めている。

何故古い形式の「ざしき」は二方向に外縁を設けるか。それは外気と接する部分を大にするためであるが、必ずしも南側に向けられてはいない。街路と主屋の棟を直角に合せ、街路と主屋の間に庭を設けることを設計理念としていたため、南側を重要視して主屋を配置することができない。つまり街路とそれに接した敷地によって配置が決まるので選択の余地が少ないことに起因して、「ざしき」を南側に設けることができなかった。

次に「げんかん」についてであるが、入口に接していることから通過する場、つまり、「ざしき」へ入る場、「ごぞ」へ入る場としての役割を意味する。他の麓の武家住宅から類推しようが、大正末から昭和にかけて

表-1 加世田麓の武家住宅一覧

番号	居住者名	年代	根拠	住所
1	宮原美佐子	江戸末期	云い伝え	武田18505
2	大島健一	1850年(嘉永3年)	云い伝え	武田18343
3	指宿綱太郎	1800年(嘉永12年)	墨書	武田18341
4	市来勝	江戸末期	形態上の特徴	武田17884
5	面高ミチ子	明治20年頃	形態上の特徴	武田17888
6	松山賢太郎	江戸後期	形態上の特徴	武田18261
7	川越康民	明治後期	形態上の特徴	武田18182

だんだん「げんかん」が狭くなって、通過する場だけに使われていることになる。つまり機能が分化することにもとづいている。古い形式の「げんかん」は広く、そこには3つの役割があった。

- (イ)通過する場
- (ロ)神棚や仏壇を安置する場
- (ハ)「つぎのま」としての場

そのうち(ハ)「つぎのま」としての場が最も大切であっただろう。指宿家住宅では「ざしき」を「一のおもて」と称し、「げんかん」を「二のおもて」と称していたことから推定しうる。それが少し時代が下ると「つぎのま」が設けられ、「げんかん」は6畳間程に狭くなる。それは(イ)通過する場への移行を示している。

「こぞ」についてであるが、古い形式の武家住宅は身舎の梁間が狭く、松山家住宅は2間半であった。指宿家住宅は復元で身舎の梁間を3間半にしたが、その3間半のうち更に半間か1間は下屋になって、背面は軒高が低かったかもしれない。ところが、宮原家住宅や大島家住宅は「つぎのま」が付加したために身舎の梁間は約3間半になる。3間半になると「こぞ」は「ざしき」に接し、「ざしき」から「こぞ」へ行ける。また「げんかん」からも入ることができるので閉鎖的な「こぞ」から開放的な「こぞ」へ変化することが分かる。

以上のことを略図で変遷過程をたどれば次の通りになる(図-1)。

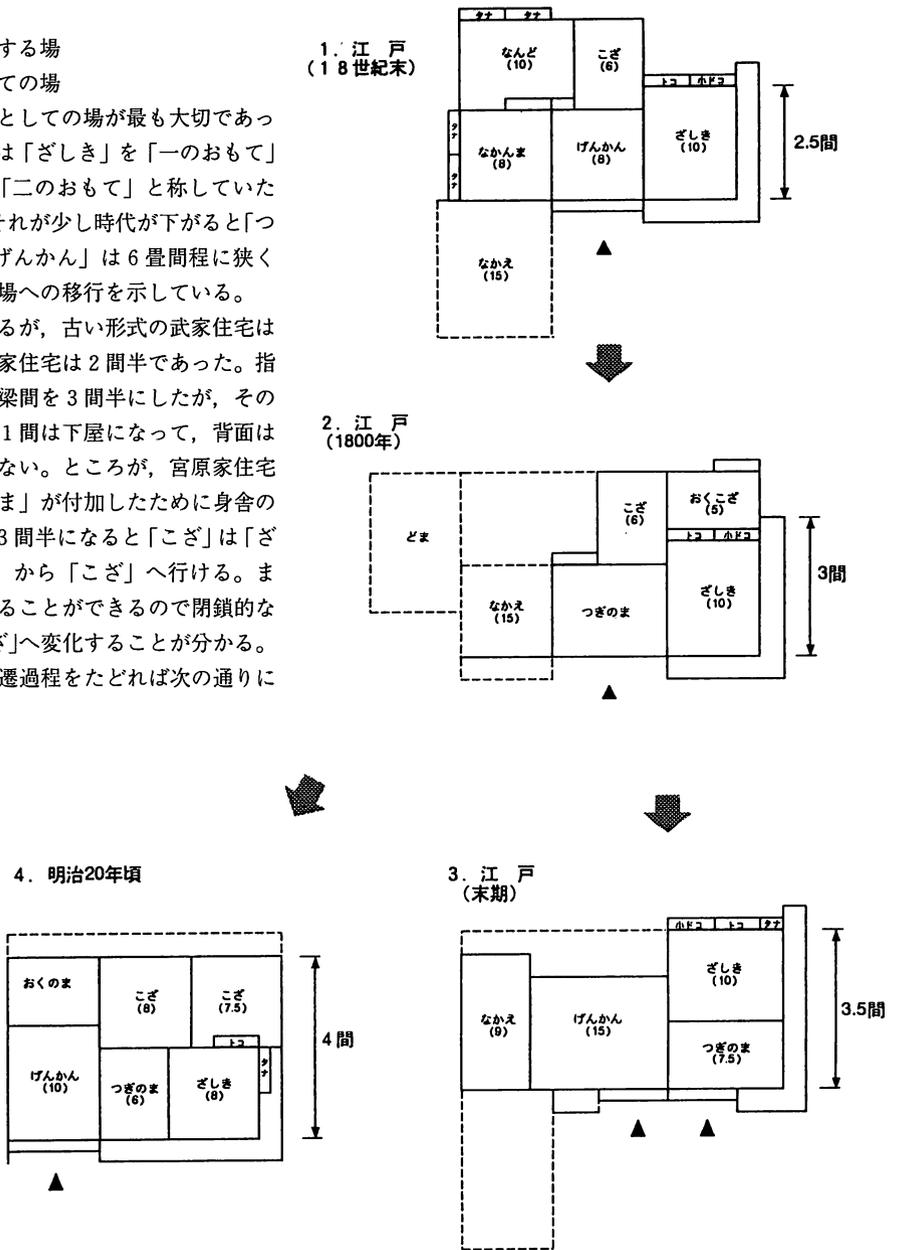


図-1 加世田籠の武家住宅の変遷過程(模式図)

4. 垂水麓の武家住宅の基本形式

垂水麓の武家住宅6棟(表-2)を平成4年8月4・5日の2日間で行ない、その結果高野家住宅や川上家住宅に基本形式的な部分を認めることができる。その基本形式で重要なことを次のようにまとめることができる。

- ①「ごしき」は一方と半分が庭に接し、外縁が廻っている。
- ②「つぎのま」がなく、「げんかん」と「ごしき」が間口を同じにして接し、トコと「げんかん」が対面している。そのために「げんかん」は「つぎのま」としての役割を果し、つづき間として使うことができる。
- ③「ごしき」の背後の部屋(「こご」や「なんど」に相当する)は閉鎖的で、「ごしき」から入れなかった。
- ④身舎の梁間は2間半か3間半程であった。

これらの特徴のうちで、トコと入口が対面し、トコの横縁側寄りに障子を入れて開放的にしていることが最も重要と思われる。その開放的な特徴は「ごしき」

と「げんかん」を緊密につないで一体化し、「げんかん」の縁側を加えることで強化されている。年代が下ると「ごしき」と「げんかん」の間に「つぎのま」が設けられる。また、トコの横にあった障子の位置にトコが移り、そのトコの位置に小ドコが入り、縁側の一方が塞がれる。更に「つぎのま」が設けられ、それに折れて「げんかん」が接する間取りも出現する。

以上のことを略図で変遷過程をたどれば次の通りになる(図-2)。この変遷過程は垂水麓の遺構から順に列べながら考察した結果で、武家住宅を一般化した変遷過程ではない。

5. 国分麓・敷根麓・清水麓の武家住宅の基本形式

敷根村と清水村は昭和29年に、国分村に合併され、30年に国分市が誕生した。各村の中心をなす麓に武家住宅があった。それらの麓に遺る武家住宅は以外に少なく、国分麓2棟、敷根麓1棟、清水麓1棟(表-3)であった。それらを平成4年8月8日から10日までの3日間で実測調査を行ない、その結果を発表した。^{注2}その発表で敷根麓の武家住宅が古い形式をと

表-2 加世田麓の武家住宅一覧

番号	居住者名	年 代	根 拠	住 所
1	高 野 今 日 子	明和年間(1764-1772)	云い伝え	田神102
2	宮 迫 一 郎	明治30年代	形態上の特徴	田神2304
3	池 田 遙	昭和初期	形態上の特徴	田神2249
4	川 上 典 夫	江戸末期	形態上の特徴	田神2288
5	伊集院 久 紀	明治中期	云い伝え	中央町45
6	三 浦 直 人	明治後期	形態上の特徴	田神228

表-3 国分麓・敷根麓・清水麓の武家住宅一覧

番号	居住者名	年 代	根 拠	住 所
1	木佐木 貴	江戸時代末期 (明治20年代改造)	形態上の特徴	清水1382-1
2	牧 元 晋 二	明治中期	形態上の特徴	中央1丁目8-29
3	楠 元 司	明治中期	形態上の特徴	中央4丁目22-7
4	前 田 国 安	18世紀末	形態上の特徴	敷根934

どめていることを指摘し、その後の変遷過程を清水麓や国分麓の武家住宅から推察しえた。その変遷過程を略平面図でたどりながら説明していきたい(図-3)。

①の段階は前田家住宅で江戸後期の復元図を簡略化している。②の段階は清水麓の木佐木家住宅である。③の段階は国分麓の牧元家住宅であり、④の段階は国分麓の楠元家住宅である。④の段階は垂水麓の武家住宅でも見られる。

①前田家住宅は入口が主玄関と玄関の二つがあり、「ざしき」奥の「なんど」は狭く、閉鎖的であり、身舎の梁間は2間半で、背面を下屋にしている。

②木佐木家住宅になると基本形式は前田家住宅と同じであるが、身舎の梁間が半間広くなって3間梁間と考えられる。

③牧元家住宅は身舎の梁間は4間になり、トコが移動して、「なんど」「ざしき」とが襖で仕切られる。梁間4間になると「なんど」は広くなり、開放的になる。

④楠元家住宅は牧元家住宅が発展した形式で、「つぎのま」が「ざしき」と「げんかんのま」の間に設けられ、六間取りになっている。身舎の梁間は4間である。

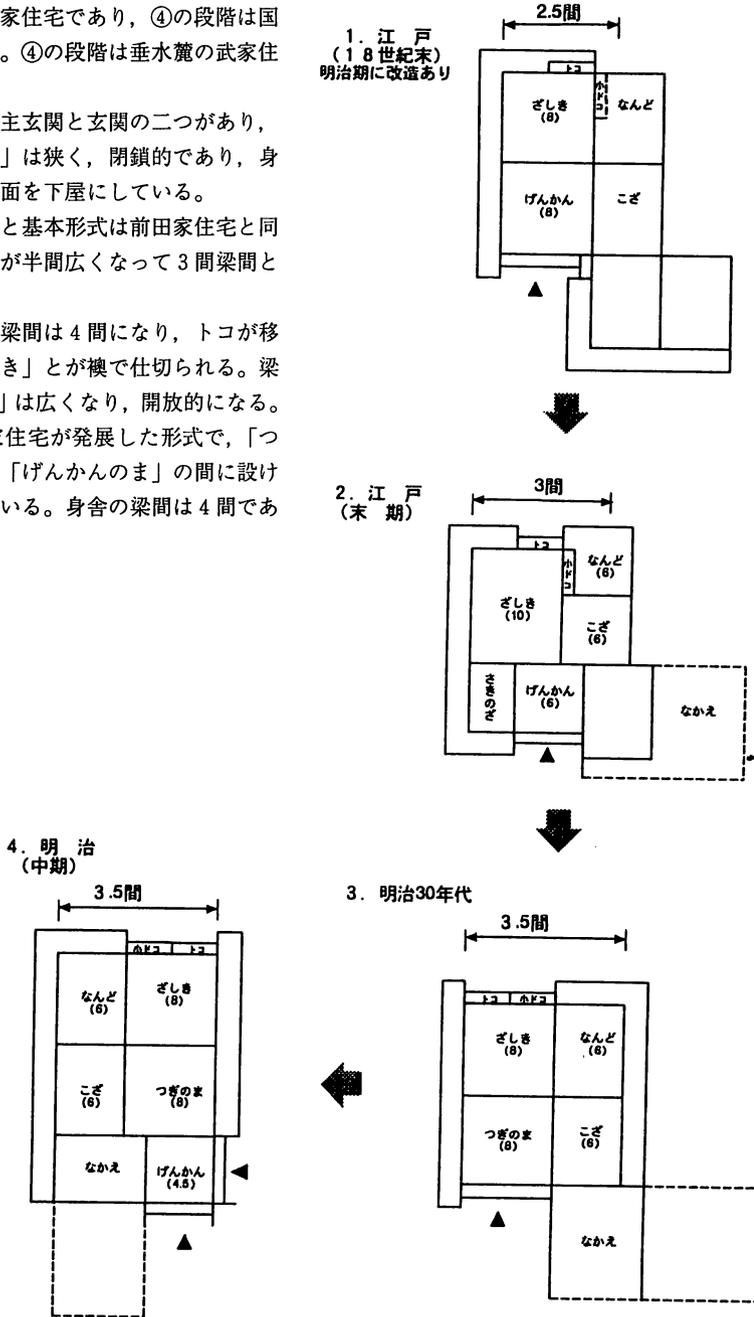
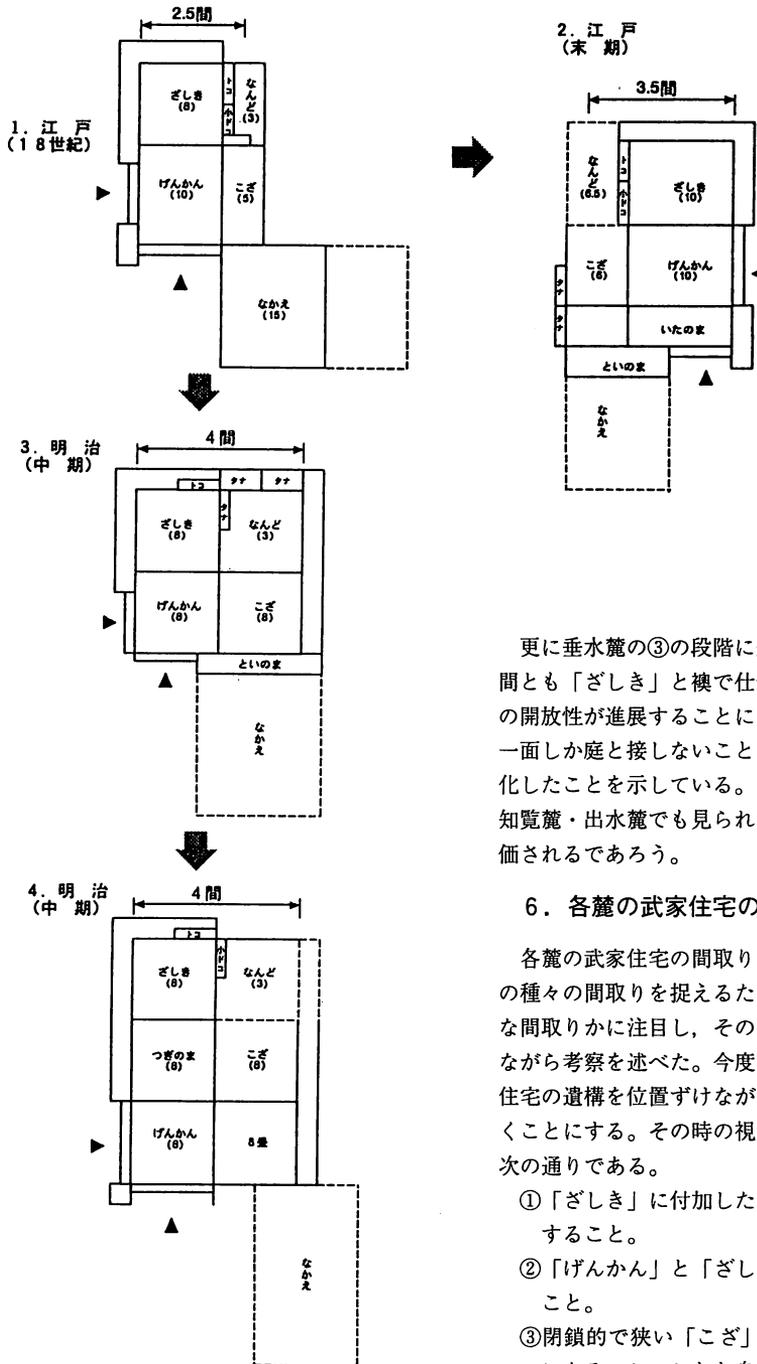


図-2 垂水麓の武家住宅の変遷過程(模式図)



更に垂水籠の③の段階に進むと「なんど」は柱間2間とも「ざしき」と襖で仕切れ、開放的になる。この開放性が進展することによって此度は「ざしき」が一面しか庭と接しないことになり、以前の開放性が退化したことを示している。にもかかわらず③の段階は知覧籠・出水籠でも見られるし、整った形式として評価されるであろう。

6. 各籠の武家住宅の遺構

各籠の武家住宅の間取りは種々の形をしている。その種々の間取りを捉えるために、基本形式がどのような間取りかに注目し、その後どう変化するかを考えながら考察を述べた。今度はその変遷過程で、各武家住宅の遺構を位置づけながら間取りについて述べていくことにする。その時の視点は3つある。その3点は次の通りである。

- ①「ざしき」に付加したトコ・小ドコ・縁側に注目すること。
- ②「げんかん」と「ざしき」の結合の仕方を考えること。
- ③閉鎖的で狭い「こご」(なんど)が広く、開放的になる。このことと身舎の梁間が広くなることとの関連を追求すること。

これら3点に焦点をあてて、各籠の武家住宅を述べていくことにする。

図-3 国分籠・敷根籠・清水籠の武家住宅の変遷過程(模式図)

イ. 加世田麓の武家住宅7棟

● 1. 宮原家住宅 (図-4・5, 写真-1~4)

宮原家住宅は片浦から船で運ばれて、再建され、道路拡張工事で再び移動されたという。片浦では野間権現の大宮司の住宅であったと伝える。門が街路に面して建ち、奥に倉がある。倉の中央に間仕切を入れて汁器・長持を入れる所と米倉とに分けている。更に米倉から前方へ倉を突き出し、そこをみそ倉にしていた。

以前は広々とした庭があったが、道路拡張で縮小された。当住宅は大きく立派であり、他からの移築であるにしても大島家住宅(図-6・7, 写真-5~8)と類似して、加世田麓の武家住宅としてもおかしくない。宮原家住宅の建立年代が分からないが、江戸時代に建てられたことは確かだろう。大島家住宅は1850年(嘉永3)に建てられたと伝えられている。宮原家住宅もこの頃に建てられたのかもしれない。

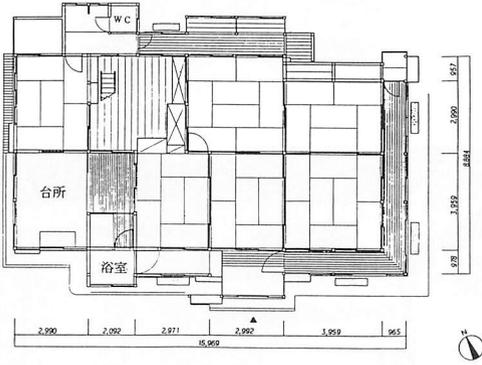


図-4 宮原家住宅現状平面図

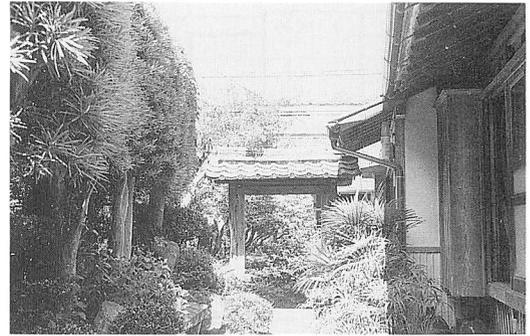


写真-2 宮原家住宅中門

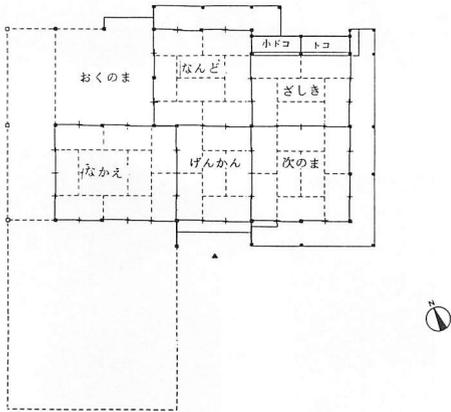


図-5 宮原家住宅復元平面図



写真-3 宮原家住宅トコと小ドコ



写真-1 宮原家住宅外観

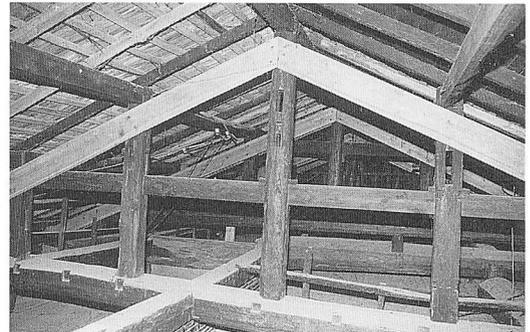


写真-4 宮原家住宅小屋組

● 2. 大島家住宅 (図-6・7, 写真-5~8)

大島家住宅は先に述べた通り, 1850年 (嘉永3) 建立と伝えられ, 「さじき」は8畳で, トコ・小ドコが一方に並び, 縁側は一方にしかないが, 「つぎのま」と一体にすれば二方に縁側が付いていることになる。「げんかん」は「つぎのま」の機能がなくなるために, 狭くなり, 通過の場としての役割を果している。「こざ」は4畳半に復元できる。それに開放的になっている。



写真-6 大島家の氏神

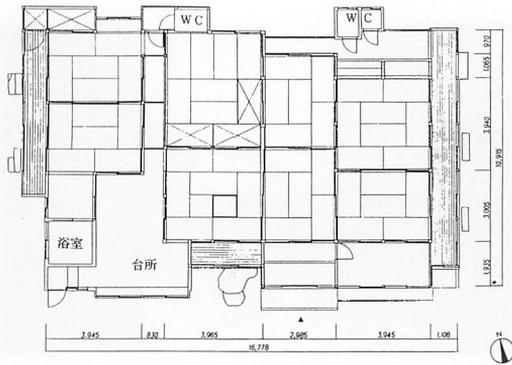


図-6 大島家住宅現状平面図



写真-7 大島家住宅トコと小ドコ

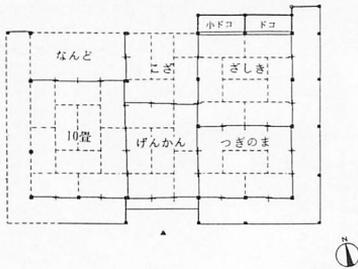


図-7 大島家住宅復元平面図

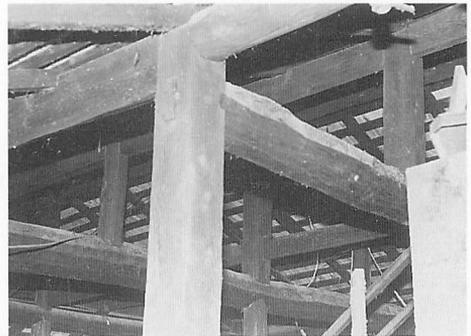


写真-8 大島家住宅小屋組



写真-5 大島家住宅外観

● 3. 指宿家住宅 (図-8・9, 写真-9~12)

指宿家住宅は建立年代を推定しうる貴重な武家住宅で, 江戸期 (1800年) に建てられた。「さじき」は10畳で「おくこざ」側にトコ・小ドコがあり, 縁側が二方向にある。「げんかん」(二のおもて) は「さじき」(一のおもて) に柱間2間で接し, 神棚とタナがある。身舎の梁間は現在3間半あるが, 当初は2間半か3間

程であっただろう。指宿家は鍵の指南を努めていた家柄である。昭和30年頃玄関を改造して荘厳にした。

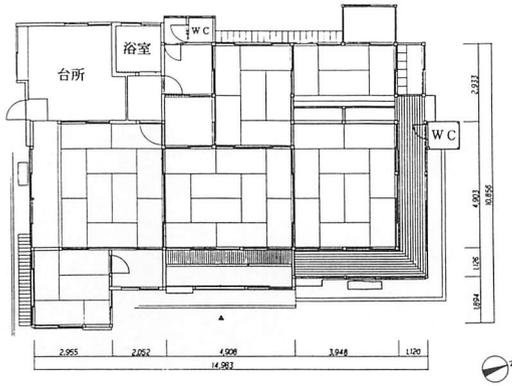


図-8 指宿家住宅現状平面図



于時寛政十二庚申歲初秋吉祥日記
門屋臺宇
指宿長右衛門貞恕代造立之
工匠
岩崎次右衛門
神田四郎左衛門

写真-10 指宿家門建立の墨書

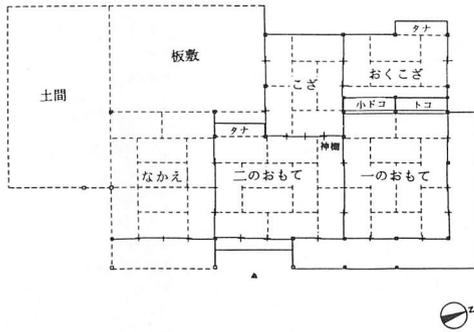


図-9 指宿家住宅復元平面図



写真-11 指宿家住宅トコと小ドコ



写真-9 指宿家住宅外観



写真-12 指宿家住宅二のおもての天井

● 4. 市来家住宅 (図-10・11, 写真-13~17)

市来家住宅は以前加世田幼稚園の前にあった住宅で、それを当地に移したと伝える。規模大でなかなか

か見事で、江戸時代末期にはすでに建てられていたと考える。「ざしき」は10畳で広く、横長で2間半に小ドコ・トコ・タナが並ぶ。縁側が一方に付き、濡縁（外縁）であった。それを昭和52年頃内縁に改造した。「つぎのま」は7畳半で、上り口が付いていた。「げんかん」は特に広く15畳で、そこには神が祭られており、背後には6畳の「こぎ」があったと考えられる。その「こぎ」は「ざしき」側にも出入口があり、開放的な造りである。「つぎのま」が設けられているということから、年代が下るとは必ずしも

いえない。それは格式の相違によって、付けられる場合と付けられない場があるためで、時期と格式との両面から追求しなければならないことを示している。

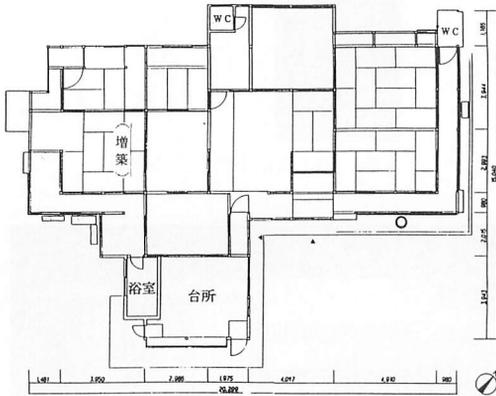


図-10 市来家住宅現状平面図

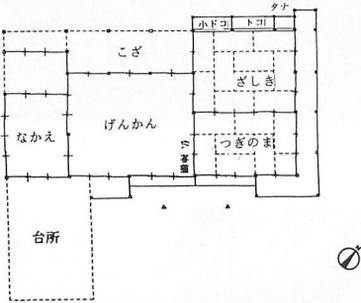


図-11 市来家住宅復元平面図

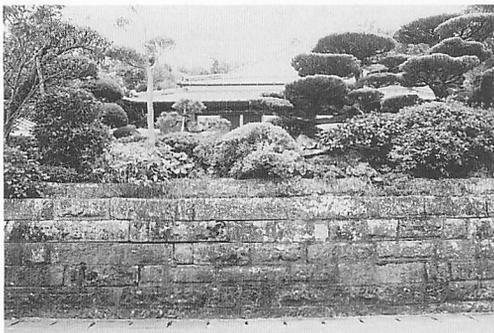


写真-13 市来家の石垣



写真-14 市来家住宅外観



写真-15 市来家住宅トコと小ドコ



写真-16 市来家住宅げんかんの天井

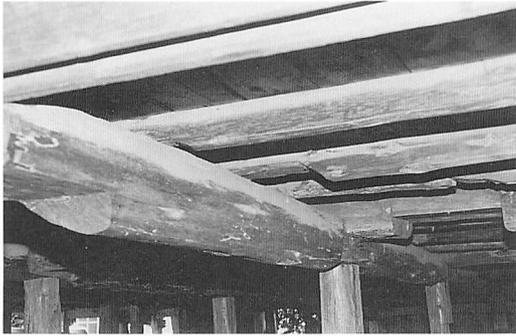


写真-17 市来家住宅の床組



写真-18 面高家の庭

● 5. 面高家住宅 (図-12・13, 写真-18~21)

面高家住宅は明治20年頃建てられたと考えられる。明治中期になると大分発展し、各部屋に長押を廻し、縁側にタナを付けたりもする。「ざしき」の二方に縁側を付け、「つぎのま」(なかのま)が「げんかん」と「さじき」の間に入る。「こざ」が開放的で広くなる。身舎の梁間4間となり、整った六間取りの住宅である。

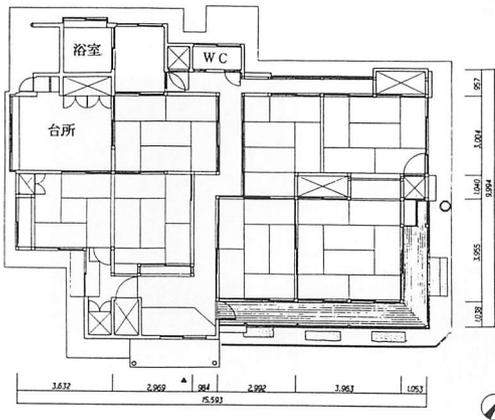


図-12 面高家住宅現状平面図

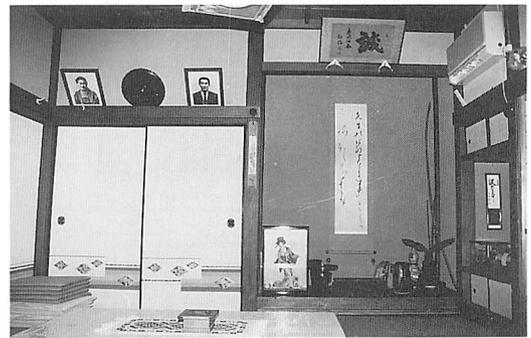


写真-19 面高家住宅のトコ



写真-20 面高家住宅のなかのま

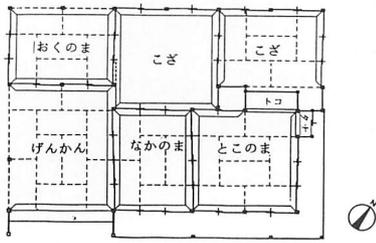


図-13 面高家住宅復元平面図

● 6. 松山家住宅 (図-14・15, 写真-22~25)

松山家住宅は建立年代を明確にしえないが、指宿家住宅とほぼ同時にたてられたであろう。よく基本形式をとどめている。「ざしき」は10畳で広く、トコと小トコを一方に付け、二方は縁側で、しかも濡縁になっており、古い形式をとどめている。「こざ」は6畳に復元しえたが、不明確なところもあり、4畳半であったかもしれない。「げんかん」は8畳間でタナがあり、神を安置していた。「ざしき」とは柱間2間で接して

いる。入口にあたる玄関は昭和40年頃増築して、荘厳にした。

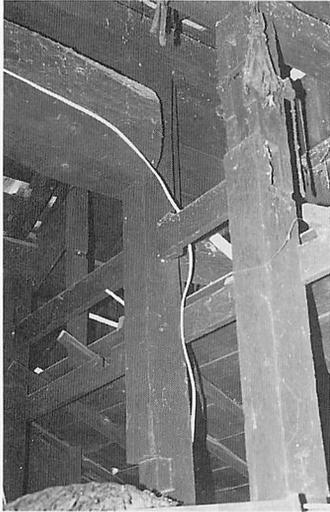


写真-21 面高家住宅の和小屋

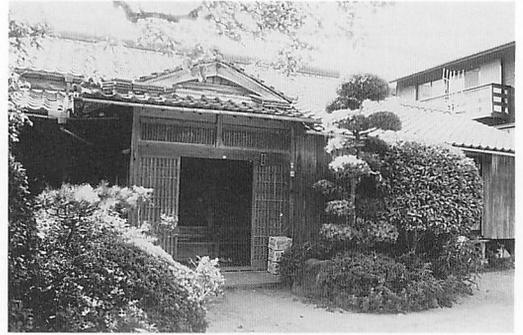


写真-22 松山家住宅外観



写真-23 松山家住宅トコと小ドコ

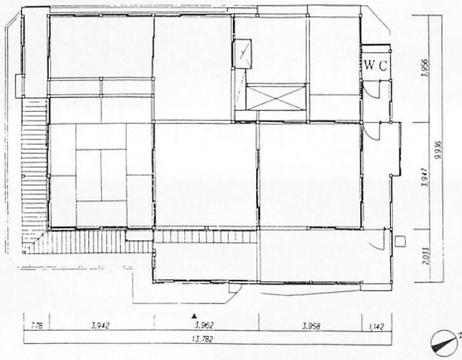


図-14 松山家住宅現状平面図



写真-24 松山家住宅の濡縁

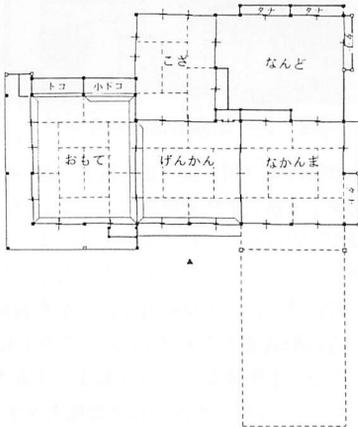


図-15 松山家住宅復元平面図

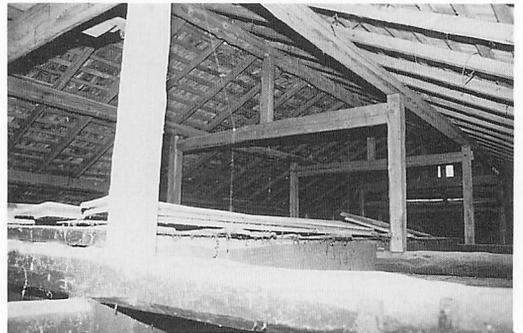


写真-25 松山家住宅の小屋組

● 7. 川越家住宅 (図-16・17, 写真-26~28)

川越家住宅は比較的新しく、明治後期かまたはそれ以降に建てられたであろう。「ざしき」は現在8畳になっているが復元すると6畳になる。「ざしき」はトコと小ドコを並べ、二方が縁側となる。「げんかん」は8畳で「ざしき」に接し、おもてとなかえがずれた位置に入口がある。この付け方は入来籠で多く見られた。「なんど」は「ざしき」背後に設け、トコと小ドコが「ざしき」との間に入るために行き来ができない。身舎の梁間3間半で小規模な住宅である。



写真-27 川越家住宅トコと小ドコ

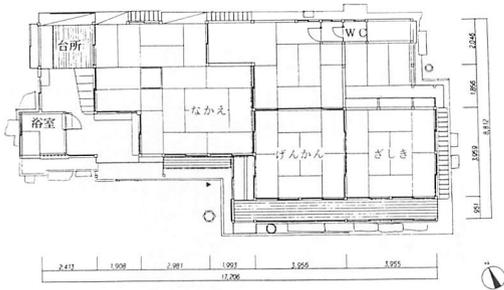


図-16 川越家住宅現状平面図

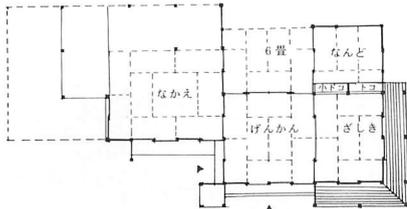


図-17 川越家住宅復元平面図



写真-28 川越家腕木門



写真-26 川越家住宅外観

□. 垂水籠の武家住宅6棟

● 1. 高野家住宅 (図-18・19, 写真-29~32)

高野家住宅は明和年間(1764~1772)に建てられたと伝えられている。トコが浅いことは年代の古さを示すが、その後の改造があり、「なんど」が付加されたり、昭和45年頃縁側を広げたりした。なかえは明治年間に本家から移築したといわれる。整形四間取りになった時期が分からない。また、トコだけで小ドコがない。「おもて」2部屋は江戸期といえるだろう。柱は杉で縁側は一方向と障子が入っている半間に付いている。「げんかん」(おもて)は「つぎのま」的役割があり、縁側が一方につき、トコとトコの横が障子であることは当籠の基本形式をとどめているように思われる。

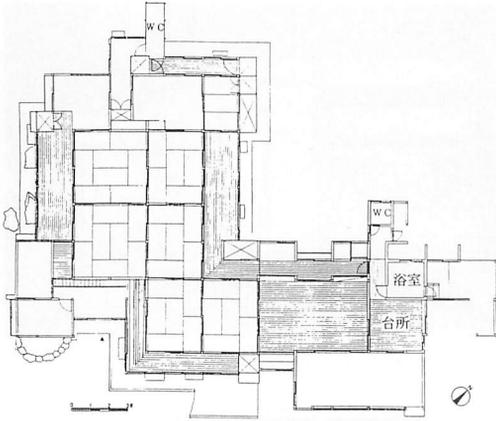


図-18 高野家住宅現状平面図

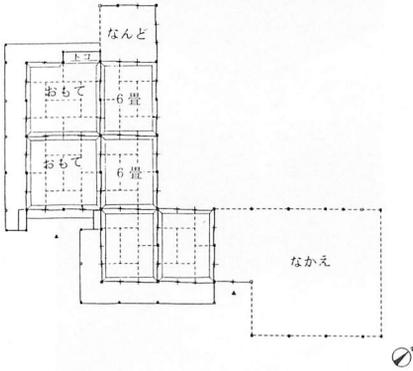


図-19 高野家住宅復元平面図



写真-29 高野家石柱門



写真-30 高野家住宅外観



写真-31 高野家住宅のざしき (おもて)

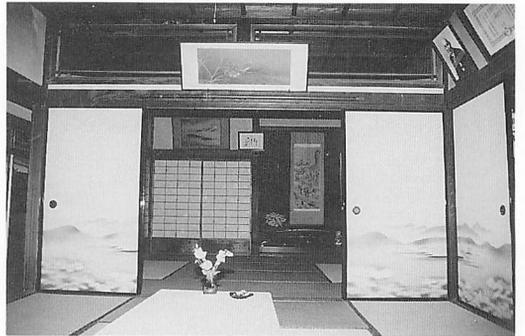


写真-32 高野家住宅のげんかん (おもて) からざしき (おもて) を見る

● 2. 宮迫家住宅 (図-20・21, 写真-33~35)

宮迫家住宅は明治30年代に建てられたと推定しうる。「ざしき」にはトコと小トコを並べ、8畳でそれに縁側が一方だけに付く。「げんかん」は高野家住宅と同様に「つぎのま」的役割を果し、入口とトコが対

面し、高野家住宅のトコの横の障子が塞がれた。それは高野家住宅が変化したものとして捉えることができる。各部屋全部に長押が廻り、身舎の梁間4間で整った形式をしている。

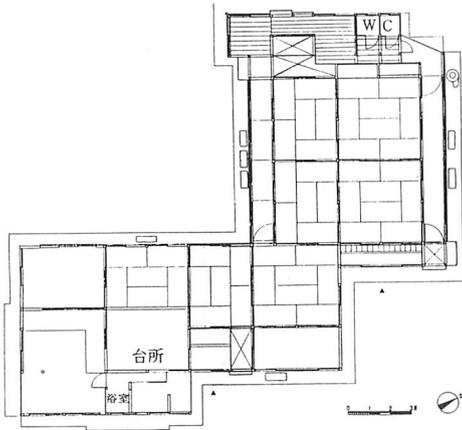


図-20 宮迫家住宅現状平面図

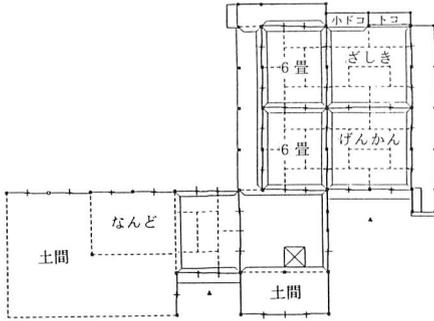


図-21 宮迫家住宅復元平面図



写真-33 宮迫家住宅外観



写真-34 宮迫家住宅げんからざしきを見る

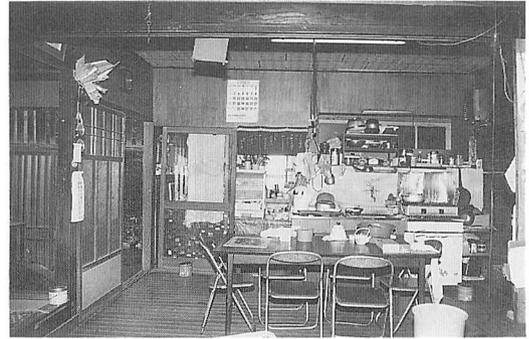


写真-35 宮迫家住宅のなかえ

● 3. 池田家住宅 (図-22・23, 写真-36~37)

池田家住宅は昭和に入って建てられたか又はその頃大改造を受けたと思われる。トコと入口が対面していることは当麓の武家住宅の特徴であり、それを昭和まで、継承されていることを示す間取りである。

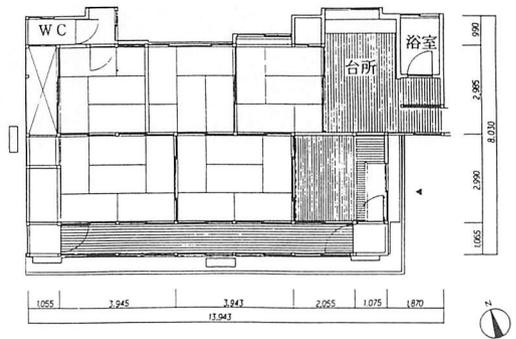


図-22 池田家住宅現状平面図

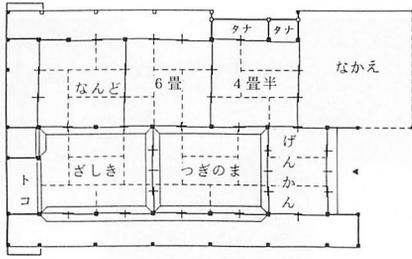


図-23 池田家住宅復元平面図



写真-36 池田家住宅外観



写真-37 池田家住宅のトコと小ドコ

● 4. 川上家住宅 (図-24・25, 写真-38~40)

川上家住宅は家老を務めた家柄で現当主は15代目とのことである。「ざしき」は10畳で、それに「なんど」側に小ドコを設け、もう一方にはトコと障子を入れるなど古い形式をとどめている。「なんど」が閉鎖的であることにも注目しなければならない。以上の形態上の特徴から江戸末期には建てられていたであろう。間取りは複雑になり「げんかん」がどうなっていたか捉

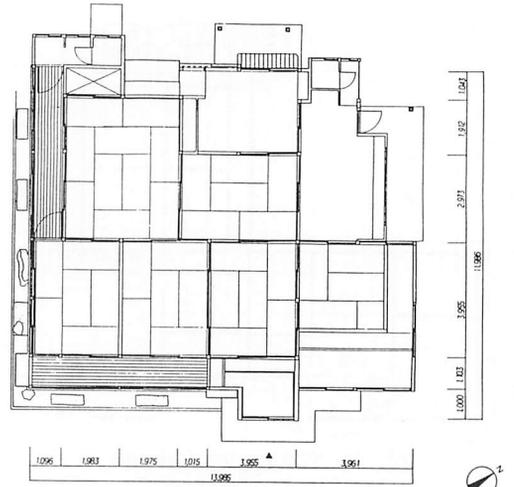


図-24 川上家住宅現状平面図

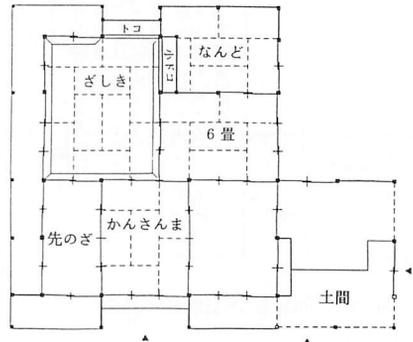


図-25 川上家住宅復元平面図



写真-38 川上家住宅外観

え難い。柱に痕跡が残っていないので、改造の時に柱を新しく建てたのかもしれない。このような不明確さがあるが、10畳の「ざしき」やトコ・小ドコの位置などはなかなか重要である。身舎の梁間は4間になっているが、当初は更に少ない梁間だったかもしれない。

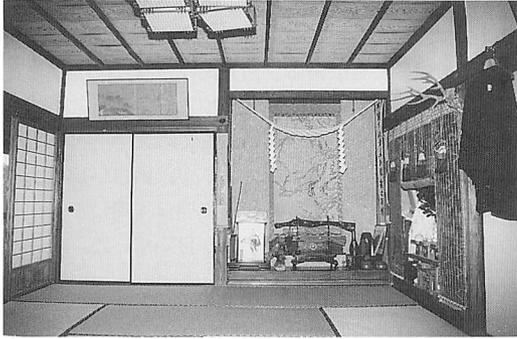


写真-39 川上家住宅のトコ

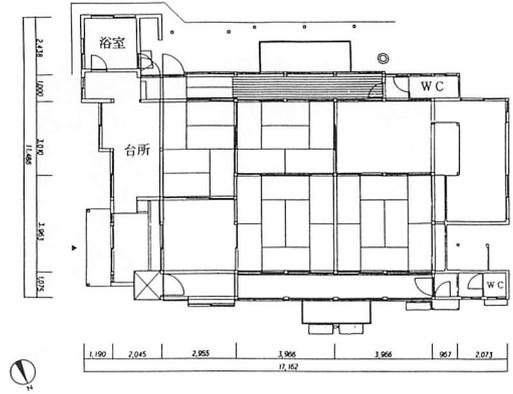


図-26 伊集院家住宅現状平面図



写真-40 川上家の氏神

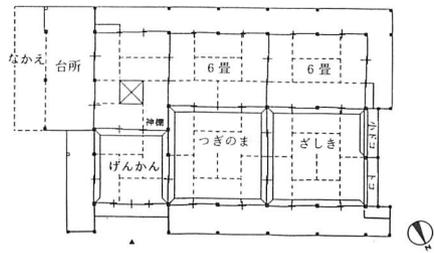


図-27 伊集院家住宅復元平面図

● 5. 伊集院家住宅 (図-26・27, 写真-41~43)

伊集院家住宅は1862年(文久2)生まれの祖父が建てたと伝えられている。30歳で建てたとすると明治25年に建てたことになる。屋敷の入口には両引戸の腕木門がある。街路と主屋との間に広々とした庭があり、なかなか見事である(写真-41)。玄関部分は昭和55年頃改造し、浴室は平成4年春に新築した。改造や増築部分があるが、よく明治期の形式をとどめている。「ごしき」は8畳でトコと小ドコを付け、庭側に内縁がある。「ごしき」の南側は6畳で、そこは竹箆子の床であったという。天井は梁を十字に架け、南側に面しているために二方向に縁側があり、開放的である。トコと対面して「つぎのま」があり、8畳でつぎの間になっている。「ごしき」と同様に長押を四方に廻し、床框に面付きのいぬ檜を使い、風格ある造をしている。身舎の梁間は3間半で、そこに半間の庇を廻している。



写真-41 伊集院家の庭



写真-42 伊集院家住宅外観

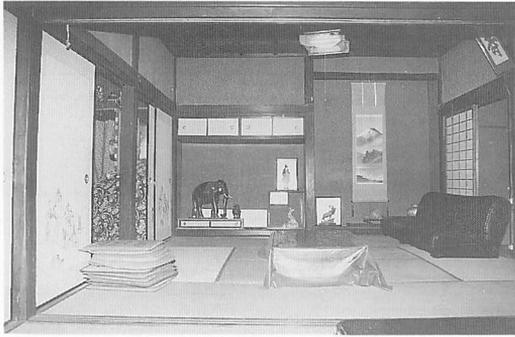


写真-43 伊集院家住宅のトコと小ドコ

● 6. 三浦家住宅 (図-28・29, 写真-44~48)

三浦家住宅は現在空家で、なかえを切り縮めている。建てられた時期は明治後期であろう。整った形式で8畳4間からなり、内縁を二方に廻し、各部屋に長押を

廻すことなどから年代を推定できる。最も特徴的なことは「げんかん」が「ざしき」・「つぎのま」と直角に折れていることである。閉鎖的な「なんど」は当初なく、後に増築された。明治後期になるとより格式を重んじたためか、接客空間がおもての大半を占めている。一見逆行しているようであるが、面白い現象として捉えることができる。身舎の梁間は4間になり、その三方に庇が付き、更になかえが付いていた。



写真-44 三浦家住宅外観

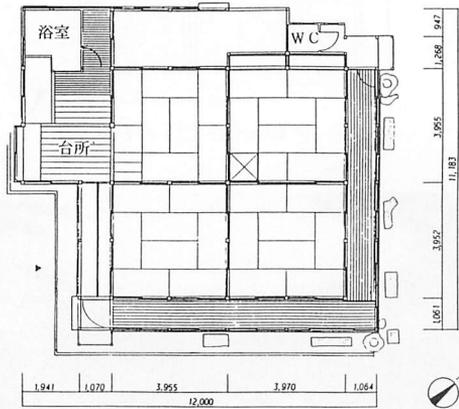


図-28 三浦家住宅現状平面図

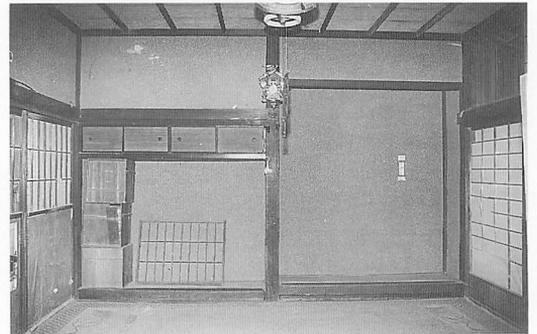


写真-45 三浦家住宅トコと小ドコ

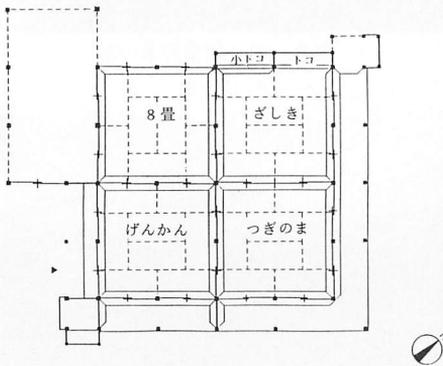


図-29 三浦家住宅復元平面図



写真-46 三浦家住宅台所



写真-47 三浦家住宅の入口

2間半か大きくても3間であったと考えられるからである。

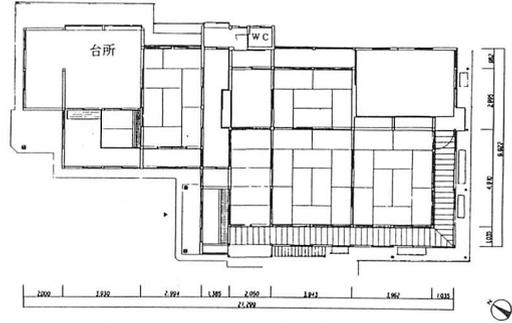


図-30 木佐木家住宅現状平面図

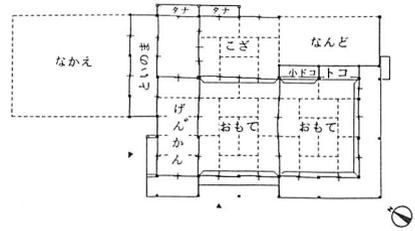


図-31 木佐木家住宅復元平面図

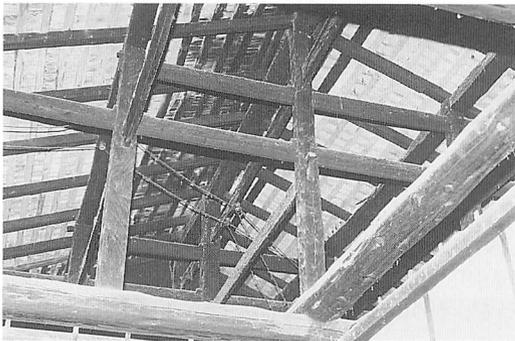


写真-48 三浦家住宅の小屋組



写真-49 木佐木家住宅石垣と門

八、国分麓・敷根麓・清水麓の武家住宅4棟

● 1. 木佐木家住宅 (図-30・31, 写真-49~56)

木佐木家住宅は珍しく茅葺きで、江戸時代の形態をとどめている。それは「ごさき」が10畳で広いことと縁側を二方に廻していることである。復元で縁側にした。そこは当初直接雨が当たる濡縁であったかもしれない。閉鎖的な「なんど」が「ごさき」の背後にある。「げんかん」(おもて)は「ごさき」と同じく10畳で広い。入口の5畳の背後3畳があり、これで6室になる。これら6室が当初からあったかどうか、明治20年代の大改造でよく分からないまま復元した。当家は横目で、所三役(曖・組頭・横目)を務めていた家柄で広い敷地を有している。現在身舎の2間の梁間の周囲に1間半の下屋を廻しているが、それは大改造の時、それ以前はもっと異なっていた。それは身舎の梁間が



写真-50 木佐木家住宅外観



写真-51 木佐木家の庭



写真-55 木佐木家住宅の小屋組の梁と合掌尻



写真-52 木佐木家住宅トコと小ドコ

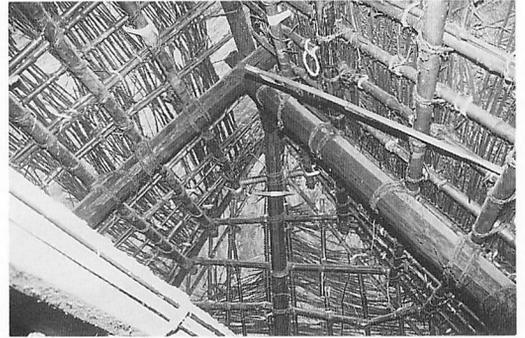


写真-56 木佐木家住宅の小屋組合掌

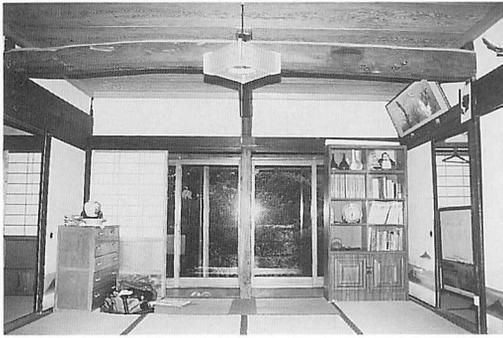


写真-53 木佐木家住宅つぎのま (おもて)



写真-54 木佐木家の納屋

● 2. 牧元家住宅 (図-32・33, 写真-57~60)
 国分籠の成立は藩主島津義久が家督を譲った後、1604年(慶長9年)12月に居館を建てた時といわれている。その後居館の西隣りに地頭仮屋を建てて、街路が整えられた。その国分籠は武家住宅が以外に少なく当住宅と次の楠元家住宅だけを調査した。両住宅はよく似ている。両者を比較しながら建立時期を推定した。当住宅の天井は高く小壁に障子を入れ、「ござ」にまで長押を入れてることなどから、明治に入ってからだ

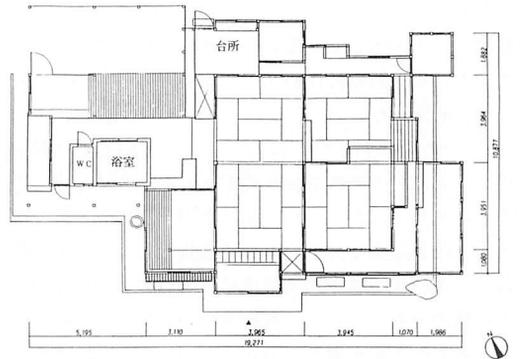


図-32 牧元家住宅現状平面図

ろう。明治中期にはすでに建てられたと推定しうる。「ざしき」（おもて）はタナとトコが鍵型に折れて設けられ、トコの横1間に障子を入れる。縁側はその障子の部分ともう一方に付く。「なんど」は「ざしき」と柱間1間だけが接し、開放的になる。「げんかん」は出入口を2箇所にかけているものの主玄関は庭側のものであろう。間取りそのものは江戸期の継承であるが、江戸期の形態では「こぞ」「なんど」が更に狭く、身舎の梁間が2間半か、3間であっただろう。4間梁間になるのは明治に入ってからと考えられる。

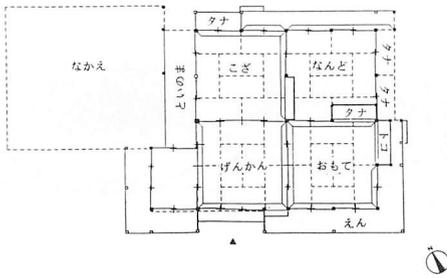


図-33 牧元家住宅復元平面図

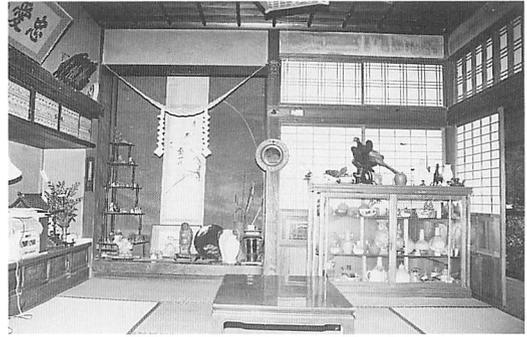


写真-59 牧元家住宅のトコとタナ

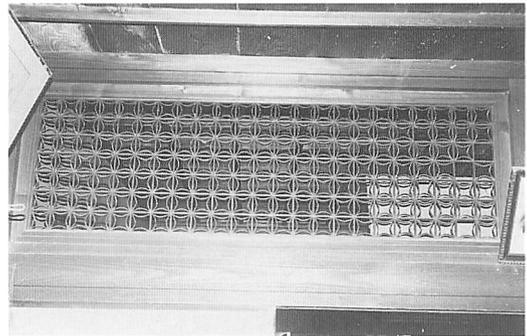


写真-60 牧元家住宅の欄間



写真-57 牧元家住宅の石垣

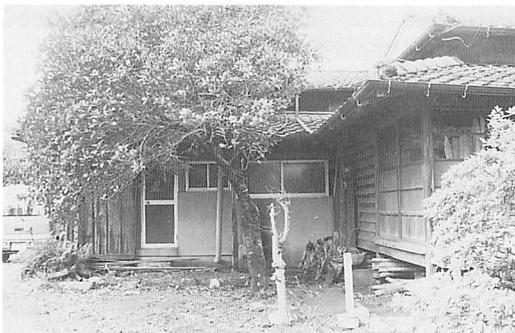


写真-58 牧元家住宅外観

● 3. 楠元家住宅 (図-34・35, 写真-61~65)

楠元家住宅は牧元家住宅よりも少し早く建てられたと思われる。それにしてもやはり明治中期であろう。当主は110年前頃に建てられたといわれ、それは、明治15年頃にあたる。差鴨居を入れて柱を抜く手法は明治になると多くなる。当家は「げんかん」と「ざしき」（一のおもて）との間に「つぎのま」（二のおもて）が入り、六間取りになっている。入口は2箇所と推定できる。身舎の梁間は4間で大規模な住宅である。ト

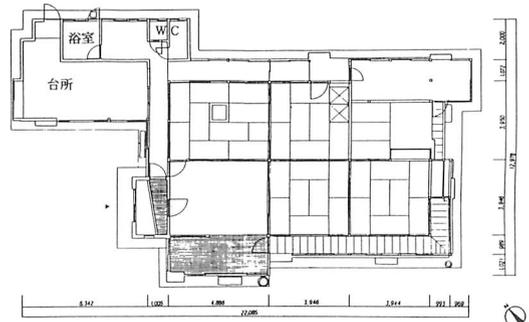


図-34 楠元家住宅現状平面図

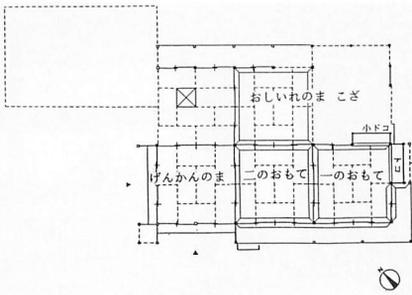


図-35 楠元家住宅復元平面図



写真-63 楠元家住宅外観



写真-61 楠元家腕木門

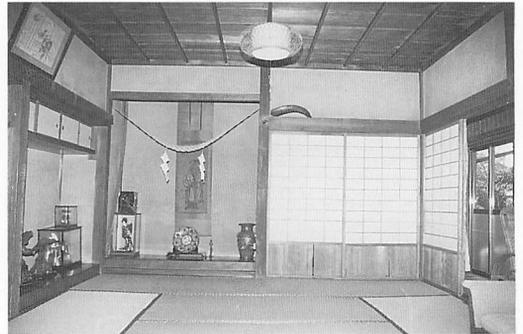


写真-64 楠元家住宅トコと小ドコ

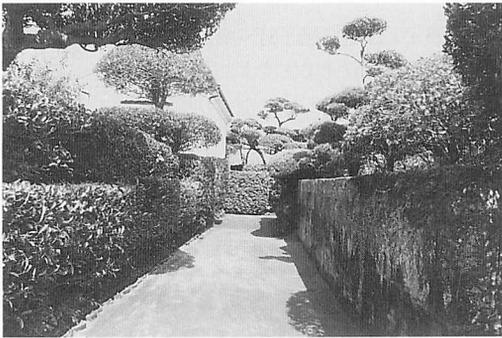


写真-62 楠元家の生垣・石垣と倉

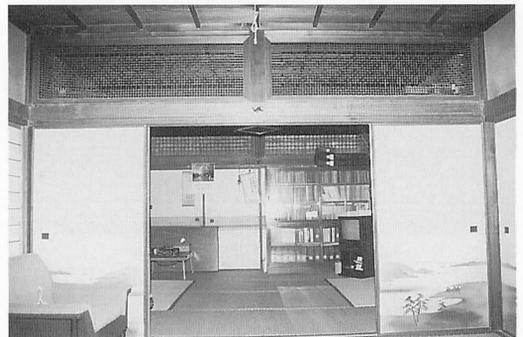


写真-65 楠元家住宅一のおもてから二のおもてを見る

コと小ドコが鍵型に折れる理由の一つに「ござ」との行き来ができる襖を設けたい意図があったと考えられる。それは年代が下るにしたがって武士の寝室（「なんど」と称したり、「ござ」と称す）が開放的になることと一致する。

● 4. 前田家住宅 (図-36・37, 写真-66~71)

前田家住宅は敷根麓の武家住宅で、古い形式をとどめており、なかなか貴重である。調査結果18世紀末にはすでに建てられていたと推定しえた。敷地内に土蔵・門・社・石垣が保存されており、当時の様子をとどめている。「ざしき」(一のおもて)にはトコと小ドコを並べ、二方が縁側となり、その縁側は現在でも濡

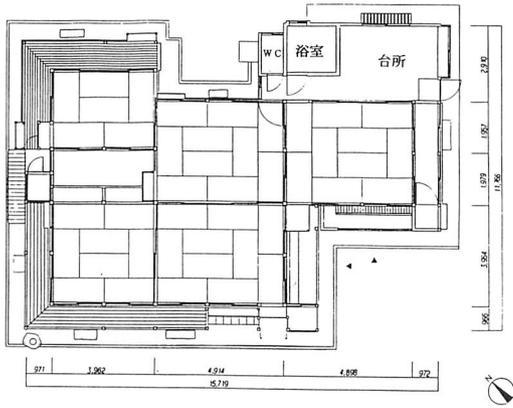


図-36 前田家住宅現状平面図

てになかえがどのように付いていたか分かり難い点があり、今後の課題としなければならないが、なかえの後方にどま（土間）があり、半土半農の区分が明確になされている。このことは農家の造りと異なる。



写真-67 前田家住宅外観

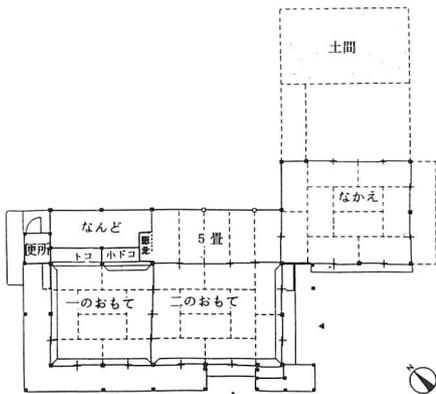


図-37 前田家住宅復元平面図



写真-68 前田家住宅のおもてとなかえ



写真-66 前田家の石垣と倉



写真-69 前田家住宅トコと小ドコ

縁（外縁）になっている（写真-71）。「げんかん」（二のおもて）には入口を2箇所設け、10畳で広い。「なんど」は3畳程度で狭く閉鎖的である。身舎の梁間は2間半で、江戸期の梁間にふさわしい。そのおも

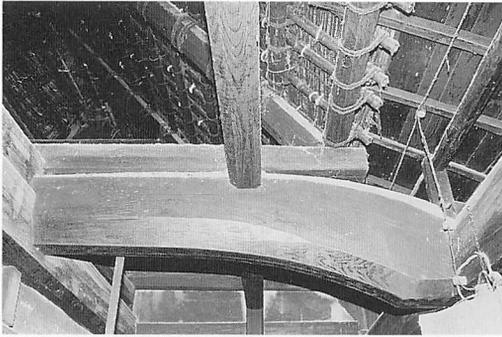


写真-70 前田家住宅の梁と小屋組



写真-71 前田家住宅の縁

7. 結 び

各籠の武家住宅の基本形式を追求し、加世田籠では松山家住宅、垂水籠では高野家住宅、国分籠・敷根籠・清水籠では前田家住宅が古い形式をとどめ、それが基本形式といえるだろう。では3グループのうちどの形式が最も古いかを比較しながら検討することも大切であろう。

その比較の前に一つだけ大切なことがある。それは街路に対し、主屋の棟が平行に配置されるか、直角に配置されるかで二つのグループに分けうることである。加世田籠は直角に配置され、その他の籠は平行に棟が配置される。それ故加世田籠の松山家住宅は一つの基本形式であり、その他の籠の高野家住宅と前田家住宅とではいずれの方が古い形式をしているか調べて

おかなければならないであろう。国分籠・敷根籠・清水籠の武家住宅の変遷過程(模式図)(図-3参照)のうちトコと障子が並ぶ時期が前田家住宅の次に出現している。したがって、街路と武家住宅の棟が平行に並ぶ最も古い形式が前田家住宅ということになる。そこで棟が街路に対し直角に配される松山家住宅と平行に配される前田家住宅が最も古い形式を示す武家住宅といえる。両者の共通点を述べることで結びとしたい。その共通点のうち「ごしき」の二方に縁側を設けることが最も大切に思われる。この縁側の位置を決めれば、必然的にトコ・小ドコの位置が決まる。したがって、武家住宅を設計するには街路・庭・縁側の関係が大切であると指摘できる。

謝 辞

武家住宅の実測調査では屋敷内だけでなく、部屋の隅々まで、また屋敷裏まで見せていただくことになる。さぞかしご迷惑をおかけしたであろう。二度と調査をしてもらいたくないと思われたかもしれない。当主のご理解とご協力がなかったら調査はできなかった。誠に有難く感謝申し上げます。また各教育委員会の方々からは私達の調査を理解していただきご協力を得た。感謝申し上げます。各地の文化財審議委員の先生には案内していただき、私達の知識不足を補っていただいたりした。また暑い日中実測調査を共にした院生・学生の協力に対し感謝したい。更にまだ多くの方々のご協力をえた。その感謝の意を表すしだいである。平面図36枚は学生駒走好文君が作図した。

注1: 「出水籠伝統的建造物群保存対策調査報告書」

出水市教育委員会 平成元年3月

「清色城と入来籠武家屋敷群調査報告書」観光資源保護財団 平成2年5月

「知覧籠伝建地区見直し調査報告書」知覧町教育委員会 平成3年7月

「志布志籠の構成とその遺構調査報告書」志布志町教育委員会 平成4年3月

注2: 土田・小山田・揚村; 出水籠の武家住宅の遺構

(薩摩藩籠計画とその遺構に関する研究-2) 日本建築学会九州支部研究報告第31号 pp.317-320 平成元年(1989)3月

楨枝・土田・小山田・揚村; 出水籠の武家住宅の屋根構造(薩摩藩の籠計画とその遺構)に関す

る研究-3) 日本建築学会九州支部研究報告第31号 pp.321-324 1989年3月
土田・揚村・守安; 入来麓の武家住宅の遺構(薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-12) 日本建築学会九州支部研究報告第32号 pp.417-420 1991年3月
木村・土田・小山田・揚村; 志布志麓の武家住宅の遺構(薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-14) 日本建築学会九州支部研究報告第32号 pp.425-428 1991年3月
迫田・土田・揚村; 知覧麓・入来麓・志布志麓の武家住宅の遺構(薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-15) 日本建築学会九州支部研究報告第32号 pp.429-432 1991年3月
土田・揚村; 薩摩藩武家住宅の座敷飾りについて(薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-17) 日本建築学会大会(東北) 学術講演梗概集 pp.1031-1032 1991年9月
土田・揚村; 知覧麓の武家住宅の遺構(薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-19) 日本建築学会九州支部研究報告第33号 pp.413-416 1992年3月
土田・小山田・揚村・木村・岩元; 大口麓の武家住宅の遺構(薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-24) 日本建築学会九州支部研究報告第33号 pp.433-436 1992年3月

土田・小山田・揚村・木村・岩元; 蒲生麓の武家住宅の遺構(薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-25) 日本建築学会九州支部研究報告第33号 pp.437-440 1992年3月
土田・小山田・揚村・木村・岩元; 高岡麓の武家住宅の遺構(薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-26) 日本建築学会九州支部研究報告第33号 pp.441-444 1992年3月
謝少明・土田・揚村; 知覧麓の佐多家住宅の復元(薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-28) 日本建築学会大会(北陸) 学術講演梗概集 pp.1037-1038 1992年8月
土田・揚村・松村; 国分麓・敷根麓・清水麓の武家住宅の遺構(薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-33) 日本建築学会中国・九州支部研究報告第9号 pp.441-444 1993年3月
注3: 土田・小山田・揚村; 旧薩摩藩麓の腕木門について 鹿児島大学工学部研究報告第34号 pp.125-141 1992年9月
注4: 土田・小山田・揚村; 街道からみた薩摩藩麓の屋敷構えと武家住宅に関する研究 鹿児島大学工学部研究報告第33号 pp.189-207 1991年9月